

するかもしれない。佐治は、死というのは生物が自然界の法則に順応することであるとあっさり述べており、死をめぐる思索が宗教観に大きく影響した形跡はない。

佐治の事例を明治期仏教徒の外来宗教との出会いにどの程度一般化できるかについては検討を要するが、仏教と死の問題が密接不離のものではないという前提条件と、普遍的宗教性というカテゴリーの採用によって自らの仏教信仰を正当化しつつ保持し得たことを確認しておきたい。

エリザベス・アンナ・ゴルドン夫人を

めぐつて

安藤 礼 二

明治の末に日本を訪れ、一人孤独に死んでいったイギリス人女性、「淋しき異邦人」であるエリザベス・アンナ・ゴルドン夫人 (Elizabeth Anna Gordon, 1851-1925) の名前は、現代においてほとんど顧みられることがない。しかし明治の後半から大きな盛り上がりを見せた雑誌『新佛教』を中心とした仏教改革運動、そのなかでも特に東西の信仰の架け橋となるような「普遍宗教」確立を目指した情熱を理解するためには、鈴木大拙夫人ビアトリスとも重なり合うその生涯と思想の軌跡こそが格好のサンプル、一つの典型的な事例になると思われる。なぜなら、日本の近代仏教の真の姿を理解するためには、内部(日

本)から外部(ヨーロッパやアメリカ)への単純で一方向的な流れだけでなく、外部から内部への重層的で多方向的な流れを検討することが必要不可欠になってくるはずだからである。つまり、日本の仏教知識人(特に男性)における比較宗教学的な知見の獲得およびキリスト教の受容のみを考察するだけでは不十分であり、ちょうどその「鏡像」となるような、比較宗教学的な知見から新たな時代の「秘密仏教」である神智学を生み出し大成したヨーロッパおよびアメリカのキリスト教知識人(特に女性)、さらにはその甚大な影響のもと仏教徒となることを志し日本を訪れた異邦の女たちによる仏教受容もまたきわめて重要な役割を果たしていたからである。重層的で多方向的な「移動と翻訳」による変化の網の目から、神秘主義的な解釈にもとづいたキリスト教と仏教を中心とした諸宗教の変革と融合の試み、一つの近代的な普遍宗教の理念が生み落とされたと考えるべきである。

ゴルドン夫人がはじめて日本を訪れたのは一八九一年、家族との世界周遊旅行の途上であった。その後約十萬冊の洋書「日英文庫」を携えて一九〇七年(明治四〇)に来日、以降一九二五年(大正一四)の死去にいたるまで、第一次世界大戦後の一時帰国をはさんで日本に居住した。大戦前は麴町に広大な邸宅をかまえ、大戦後は京都ホテルに滞在、六年間でただ一度しか外出しなかったと伝えられている。雑誌『新佛教』第七巻第八号(明治四二年八月)に「物言う石 教ふる石」を掲載、同じ年からの論考を小冊子としてまとめ、丙午出版社より『弘法大師と景教』として同内容ではあるが何種類かの異なった版を

パネル

刊行している。近世や近代ではなく、そのはるか以前に弘法大師・空海を通じて景教（アジアに宣教したキリスト教異端ネストリウス派の教え）が日本に伝来し、仏教（真言密教）と習合したと主張、キリスト教と仏教の教えはもともと同根であったとする仏耶一元論を提唱した。また古代の日本には、渡来人の秦氏として多量のユダヤ人が移民していたという日ユ同祖論を展開、東西の信仰を一つにつなぐ新たな救世主として弥勒を位置づけていた。外国人女性としてはじめてシカゴで開催された万国宗教者会議に出席した僧侶の一人である高野山管長の土宣法龍より真言宗の戒名を与えられ、高野山奥の院に大秦景教流行中国碑のレプリカを建立（一九一一年）、その傍らに葬られることになった。

早稲田大学図書館、高野山大学図書館には夫人が生前に蔵書を寄贈したゴルドン文庫が存在している。特に早稲田大学に残された約一五〇〇冊の洋書類は、一九世紀に英語圏で刊行された東西の宗教学、神秘思想に関する重要な文献を集大成したかのような非常に特異なアーカイヴを構成している。ブラヴァツキー、アニー・ベザント、チャールズ・リードビーターなど神智学関係の書籍も多い。直接教えを受けた学問の師であるマックス・ミュラー、夫人を日本に導いた高楠順次郎、さらには来日後にも親密な関係が続けた下田歌子など、その人間関係においてもヨーロッパの比較宗教学とアメリカの神智学、日本の近代仏教学および宗教学を相互に結び合わせる重要な結節点となるような人物であった。

鈴木大拙における東洋と西洋

——在米中の思想変遷を中心に——

守屋友江

本発表では、長期にわたる鈴木大拙の宗教的求道における、初期のアメリカ滞在時代の意義を考察する。その時代は世紀転換期にあたり、アメリカの宗教思想自体も大きく変化し、またヨーロッパでは「仏教」が新たに発見され始めた時期に相当する。こうした変化や発見を経験する中で、鈴木は後年の「東洋と西洋」を対比する思想軸、言語よりも宗教的精神そのものの直接的把握というスタンスを養うこととなった。

渡米以前、鈴木は東京帝国大学で哲学を学びながら円覚寺で参禅する中で、新時代にふさわしく、西洋の科学的知識と抵触しない宗教に理想を求めていた。しかし、鈴木は渡米先で勤めていたオープン・コート出版社のポール・ケラーズの合理的な宗教観（鈴木という「科学教」には次第に否定的となっていた。理論的な宗教観への距離と反比例する形で、スウェーデンボルグや神智学へ接近するようになる。また、ウィリアム・ジェイムズの著した『宗教的経験の諸相』を、「宗教心」に富んだものとして評価する姿勢も強く示す。

興味深いのは、これと並行して宗教に基づく社会変革への言説も非常に多くなることで、「新仏教徒同志会」の綱領と相通ずる内容となっている。実際に、彼は帰国後に同会の評議員と